

第 34 回大阪大学野田村サテライトセミナー

野田村の宝を語ろう

—市日とのだ塩の魅力—

2015 年 12 月 11 日、野田村生涯学習センターにて「第 34 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回のセミナーは、「がんばるのだー岩手県九戸郡野田村の地域力ー」（弘前大学出版会 2015 年 3 月）の出版を記念して、弘前大学と大阪大学が共催して開催しました。7 月、9 月、12 月の 3 回シリーズの最終回です。

講師には、チーム北リアス共同代表・京都大学の永田素彦准教授、弘前大学の小谷田文彦准教授を迎え、本の中から野田村の「市日」と「のだ塩」についてお話いただきました。市日の会計係を務められている坂下充子さん、野田村歴史の会の吉田照夫さん、のだ塩復活の立役者の久慈広域観光協議会・チーム北リアス現地事務所長の貫牛利一さんをお招きし、講師との対談形式で野田村の宝について語り合いました。

今回も、遠隔教育システムを使用して、大阪大学吹田キャンパスをつなぎ、同時中継でセミナーを行い、大阪大学の教職員や学生とも交流を深めることができました。

のだ塩づくりとは何か 永田素彦先生・貫牛利一氏

永田先生が、のだ塩に興味を持たれたきっかけは、三陸鉄道の車内アナウンスだったそうです。陸中野田駅に到着する時には「ソルトロード」の地として紹介されています。

野田村は海水の汲み上げに適した砂浜が広がっていることから、江戸時代から製塩が盛んになったそうです。野田村の人々は塩を牛の背に積んで盛岡等へ運び、米などと交換し、製塩は野田の人々にとって生きていくための貴重な産業だったそうです。しかし、戦後、専売公社による製塩の独占が行われ、自給製塩が停止し、野田村の塩産業は衰退してしまったそうです。

1980 年代は、一村一品運動など地方活性化への取り組みが盛んになってきた時代ですが、野田村では十府ヶ浦海岸で砂祭りが始まり、貫牛利一さんをはじめ青年会が中心となって、塩づくりにチャレンジしたのが、現在の「のだ塩」のはじまりだと語られました。それまでも地域を活性化させるために様々な取り組みが模索されていましたが、海岸の清掃活動など、長続きしにくい活動しかなかったそうです。

貫牛さんは、当時の想いを次のように語りました。

「今から 30 年前、私は野田村に生まれて野田村に育ってきたが、初めて会った人に、野田村を説明する時に八戸の下とか、宮古の上とか言っていた。野田村を自信をもって紹介できないと思っている一方で、何か野田村らしいものをつくっていきたくて考えていた。」

「有志で『ふるさと野田研究グループ』をつくり、昔、野田で行っていた製塩方法で塩を作ってみようと思い立った。みんな仕事を持っているので、週末に 24 時間寝ずに塩づくりに取り組んだ。最初は失敗ばかり。海水を釜まで持っていく距離を短くするために、浪

打際に釜をつくったが、満ち潮の時間がくると、どんどん波打ち際が迫ってくる。あわてて釜の位置を動かした。また、火加減を間違い、はじめの頃にできた塩は赤かったりと。」

永田先生は、貫牛さん達が取り組んだ、のだ塩の復活は「創造的昔返り」だと言われました。

直煮製法でつくる、のだ塩は時間がかかっているということが価値になっている。のだ塩をつくるのが、野田村の人が、塩だけじゃない、砂浜、他のまちにないものに気がつくきっかけになっているのではないかという意見もでました。

会場から「まちづくり活動に取り組むとき、人を集める求心力になっているものは何ですか？」と質問があり、貫牛さんは、「自分が面白いと思わないと長続きしないと、途中で気がついてきた。自分はどこまでできるのかと問いかけ、自分できることの範囲を知り、廻りにいる人の力を知ることが大切。」と話されました。



市日の魅力と役割 小谷田文彦先生・坂井充子氏・吉田照夫氏

小谷田先生からは、市日を通して、震災と地域文化・商活動についてお話いただきました。

野田村の朝市は、毎月、6のつく日（6日、16日、26日）に開かれます。現在は愛宕神社の参道広場で朝の10時ごろからお昼過ぎまで、十六日市日の会が運営しています。かつて、野田村の市日は本町通り沿いで開催され、村の規模に比べて、大変賑わいのある市が開かれていたそうで、大正元年の様子を写した写真を紹介いただきました。

昔に比べると出店数が減り、買い物客も少なくなっていますが、震災後もすぐに復活し

た野田村の市日について、坂下さんは次のように語ります。

「お客さんとの会話が楽しいから市日が続いている。買い物だけが目的ではなく、コミュニケーションの場である。特に高齢者の方にとっては、貴重な外出の機会になっています。」

また、震災1月後に市日を再開した経緯についてもお話くださいました。

「震災直後の参道広場は、人も通れないくらいの瓦礫と泥の山でした。夫と2人で清掃し、掃除をするので市日を再開させたい、続けたいと行政にお願いに行きました。4月6日に再開した時は、2、3人しかお客さんは来なかったが、用意した野菜は帰りに配りました。」と。

震災後は生活や生業の再建が第一で考えられ、市日などの支援は、その次の案件だと認識されがちであり、復興時に商業活動をどう捉えるべきなのか、人々にどのように認識してもらうべきなどかを考えないといけないと小谷地先生は話されました。

また、元行政職員であった吉田照夫さんは、

「行政は場をつくること、土俵をつくることはできる。しかし、専用の空間をつくるのではなく、多目的に利用できる空間として整備したほうがよいと考えている。

また、個人的には、坂下さんのお漬物だったり、骨董屋、包丁研ぎなど多様な店舗の出店だったり、他の地域の市日にはない野田村の市日の魅力を創っていく必要がある。」と話されました。

会場からは「野田村の若者がコンビニで物を買っているようでは、野田村は元気にならない。市日に若者が参加するような企画を」と意見があり、ボランティアの活用など様々なアイデアが出されました。



次回は、2016年1月11日に「東日本大震災から利他を考える」と題し、コンポジウム（音楽コンサートとシンポジウム）を大阪大学野村サテライトで開催します。